

英米文化学会第84回例会のお知らせ

標記の例会を下記要領にて開催します。

◆開催年月日：平成6年3月12日（土）

◆時間：3：00-6：00

◆場所：拓殖大学文京校舎 A館307教室（地下鉄丸の内線茗荷谷駅徒歩3分）

◆研究発表 3：00-5：00

1. 早期英語教育におけるレディネスとその後の指導方法

田辺 寛（恵泉女学園大学）

司会 細田 陽子（星美学園短期大学）

西田 和子（浪速短期大学）

司会 石山伊佐夫（桐蔭学園横浜大学）

増澤 史子（昭和女子大学）

司会 石川 郁二（城西大学）

2. 異文化間コミュニケーションの重要性
-英語と日本語との間で-

◆総会 5：10-5：40

◆懇親会 6：30-8：30

場所：ホテルクレリオ東京（池袋駅西口徒歩4分） 地下1階ジェイドガーデン

会費：5,000円

英米文化学会第85回例会のお知らせ

標記の例会を下記要領にて開催します。

◆開催年月日：平成6年6月18日（土）

◆時間：3：00-6：00

◆場所：日本大学歯学部3号館第7講堂（3階）

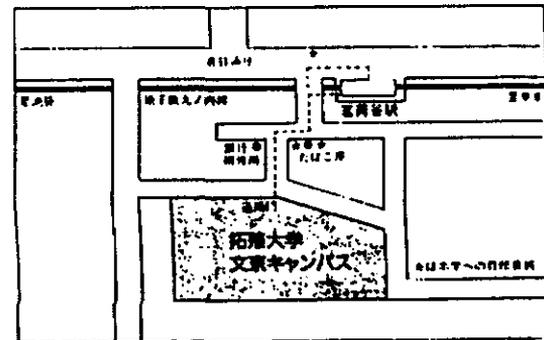
（お茶の水ニコライ堂隣）

研究発表をご希望の場合には、3月31日（木）までに発表時間

（A：20分、B：40分、C：60分）を明記の上、発表要旨レジメ

（400字程度）を添えて副会長高取清先生にお申し込みください。

高取先生ご住所



文京キャンパス

地下鉄丸の内線茗荷谷駅下車徒歩3分

↑ 第84回例会会場

英米文化学会第12回大会のお知らせ

標記の大会を下記要領にて開催します。

◆開催年月日：平成6年8月25日（木）・26日（金）

◆場所：函館大学（〒042 函館市高丘町142 電話 0138-57-1181）

◆講演者：未定

◆宿泊先：ホテル第2オーシャン（函館駅前）

研究発表をご希望の場合には、3月31日（木）までに発表要旨レジメ（400字程度）を添えて副会長高取清先生

にお申し込みください。なお、発表時間は30分とさせていただきます。

研究発表申し込みの締め切り日について

『英語青年』等の雑誌に例会開催予告をお願いする関係上、第86回例会より、研究発表申し込みは例会開催日より3箇月前までをお願いいたします。

会費納入のお願い

平成4年度、5年度会費未納の会員にはお知らせと郵便局の振替用紙を同封してありますので宜しくお願いいたします。年会費は3,000円です。なお、納入済みであるにもかかわらず振替用紙が同封されている場合には、ご面倒でも財務の石川先生までご連絡ください（電話 0492-95-0346）。

第84回例会研究発表レジュメ**◆早期英語教育におけるレディネスとその後の指導方法**

田辺 寛

日本の英語教育一般に論じられることではあるが、English as a foreign languageの環境下における早期英語教育の問題点として考えられるものの一つに英語そのものに触れる機会の少ないことがあげられる。

この条件下で英語に接する時間を確保するという意味で英語の4技能の分類の中で比較的使いやすい方法はリーディングである。

12才までに高校レベルの英語リーディング能力を身につけた児童に対するアンケート結果をもとにその成功要因と考えられるレディネスの問題とその後の指導方法について論じる。

◆異文化間コミュニケーションの重要性

西田和子

—英語と日本語との間で—

異文化コミュニケーションの重要性は、特に異なる文化背景を持った人々との出会いの場で、強く関心が示されるであろう。特に今日、交通機関やマスメディアの発達により、この出会いの増大は、個人、社会、国家のレベルで行なわれている。

本発表では、このテーマは言語と文化との関係から考察したい。例えば、サビア・ウォーフ仮説、チヨムスキーの生成文法、1960年代からの社会言語学など、この点について興味ある見解を示す。

特に、言語を内と外の面からとらえ、それぞれの糸のつながり具合と切れ具合を分析してみたい。

◆ 'What am I really listening to?'

増澤史子

The American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) が開発した Oral Proficiency Interview (OPI)=[インタビュー形式による会話能力測定法]の試験官になる研修を受け、それを通して、外国語教育にどのように応用できるか考えてみた。この方法は、最初、多く入ってくる移民を政府で雇う際に語学力のテストが必要になり、アメリカの国務省で開発されたものである。レベルは初級 (Novice) から超級 (Superior) まで細かく9段階に分けられ、試験官が正しく被験者のレベルを30分のインタビューで判定しなければならない。現在、日本語教育の分野ではこの方法が用いられてきている。オーラルコミュニケーションが益々重視されている今、この方法を紹介し、Non-native Speaker of EnglishがどれだけNon-native Speakers' Englishをテストできるかその問題点を指摘してみたい。

◆マーク・トウェイン著、勝浦吉雄訳『マーク・トウェイン短編全集(上)』文化書房博文社、2,500円

(平成5年11月30日刊)

30余年ぶりに改訳された本書では、トウェインが生み出した数々の個性豊かでユーモラスなキャラクターたち(人間たちも、そして動物たちも)が、訳者の手によって息をふきかえしている。彼らの活躍ぶりは読者を存分に笑わせてくれる。中には人を喰った作品もあり、いたずら好きなトウェインの顔が見え隠れする楽しさもある。そして何よりも、トウェインが短編の名手であることをあらためて感じさせる本である。

上巻に選ばれている作品群の中でも特に代表的な短編である「キャラヴェラス郡の跳び蛙が評判になる」に登場するイーラー爺さんの、本筋から延々と逸脱していく語り口は翻訳においても失なわれていない。また、「バック・ファンショアの葬式」の中で、西部の荒くれ男スコッティ・ブリッグズが会話の中でネヴァダ州の俗語をひんぱんに使い、東部出身の若い牧師が目まわす場面は、原文の味がそのまま活かされている。さらに、歴史上の人物・地名、そして一般の読者に少々説明が必要であると思われる事柄・表現にも訳注が丁寧に施されている点も、この短編集を読み易く、親しみ易いものになっている。

作品の配列は、トウェインが作家としてデビューした頃のものから晩年のものまでを発表された年代順にならべられている。上巻は、特にトウェインの代表作を網羅しているため彼の作品になじみの薄い読者でも、トウェインの作家としての足跡をたどることができる。また、改訳にあたり新たに付け加えられた作品中、冒頭の2作は、アメリカ中西部の tall tale の影響を受けた初期の作品の特徴を明らかにしている。一方、「従軍失敗私記」は自伝的要素が濃く、また、「人間とは何か」に表わされているトウェインの晩年の思想を理解する手がかりにもなる。が、あまり堅苦しい事を考えず、肩のこらない読み物として楽しめる方が、トウェインの意図にも、そしてまた今回の改訳の意図にも添うであろう。(吉田真理子)

◆アイザック・ウォルトン著、曾村充利訳『ジョン・ダン博士の生涯』こびあん書房、四六判、364頁、3,500円(平成5年8月刊)

ウォルトン著 *The Life of Dr. John Donne* のこの翻訳は、曾村氏が『法政大学多摩論集』第六巻(1990年3月)、第七巻(1991年3月)に載せた「ジョン・ダン博士の生涯」(上)(下)が土台になっている。氏は大学院時代からダンの作品に魅せられ、最初はダンの若い頃の詩を研究していた。数年前からダンの宗教詩・ダンの生涯にも研究の枠を広げており、本翻訳は氏のケンブリッジ大学留学時代に完成されたものである。

日本語は流暢で読み易くウォルトンの文意・文体をよく伝えている。例えば、John Donne, Anne Donne, Undone を「ジョン・ダン、アン・ダン、暗澹」と訳している。注によると、この「印象深い洒落」は第4版で初めて引用されているということだが、原文の面白さをうまく伝えている。

注を読むと『ダン伝』の訳文に表されていないダンの素顔が鮮明になる。第1版から第4版までの『ダン伝』の訂正・変更についての記述、『ダン詩集』や『書簡集』さらに現在までの重要な研究書・批評書等をも参考にし、原注の問題点はケンブリッジ大学図書館希観本室蔵の1875年版を実際に調べて氏の解釈を載せておられるのは、真摯な学術的態度を垣間見る思いである。

本書にある解説からも分かるように、氏はウォルトンの『ダン伝』を一方向的に賛美することなく、伝記中の誤りや疑問点をも客観的、実証的に論じ、研究者の立場を常に堅持している。

本書は単に訳書として片付けることのできないほど詳細きわまるダン伝であり、ウォルトン伝にもなっている。解説では、ウォルトンの小伝、思想、さらに彼の交際範囲を調べ、ウォルトンの人生観にまで踏み込んで論じている。それが氏のダン研究へ大きな貢献をなすものであろうことは明白である。

読んでみると誤植と思われる箇所があるのは残念であるが、ケンブリッジで2年間研究され、「ウォルトンからダンを調べる」という研究から生まれた本書(訳・注・解説)は、氏の最近のダン研究の集大成ともいえる業績であり、今後のダン研究、ウォルトン研究になくってはならない書物の一冊になることであろう。

(石川 郁二)

分科会活動状況報告

1. 第一分科会

去る12月5日(日)に会合を開き、年内にまとめる予定の『たたかう性——英米文学作品におけるヒロインたち』(仮称)について検討しました。出席者は、*吉田(俊)、相良、須田、五味田でした(出席者の敬称略、以下同様)。次回の会合は、2月20日の予定。まとめた原稿について各自発表をし、質疑応答を計画しています。

2. 第二分科会

12月22日(水)に会合を開き、今回は、上野氏から、Yolanda Barnes "Red Lipstick" (*Prize Stories 1992 The O. Henry Awards*) についての啓発的な発表があり、活発な質疑応答が行われました。出席者は、*佐藤(成)、高取、上野、相良、君塚、五味田でした。季刊文芸誌『P0』'94春75号の「特集・アメリカ文学」を分科会のメンバーが執筆する予定。次回の会合は、2月21日(月)の予定。

3. 第三分科会

12月4日(土)に会合を開き、研究成果を本の形にまとめる上での統一的基準を検討しました。ほとんどのメンバーが、本の第1部にあたる部分を論文として執筆済みです。次回の会合は、3月12日(土)の予定。

4. 第四分科会

12月26日(日)に会合を開き、英米文化学会第11回大会で行なった研究発表の反省と今後の抱負について検討しました。出席者は、*亀山、石井、高橋、藤田、細田、伊東、平川でした。1月30日(日)に会合を開き平成6年度の大会にむけてのプロジェクトの打ち合わせをしました。「ビデオ教材の字幕の利用法と効果」についての話題が出ましたが、今後検討してゆきたいと思います。次回の会合は、3月20日(日)です。

5. 第五分科会

1月13日(土)に例会を開き、渡辺節子氏の「今度ニューヨークで考えたこと」についての研究発表がありました。談話風発の楽しい一刻がもてました。出席者は、*小河原、大島、山下、田辺、石山、越智、日高でした。また、2月12日(土)にも例会が行われ、小河原氏から「海外投資の実際」の発表がありました。文中、お名前の前に*の付された先生はそれぞれの分科会の代表者で、分科会委員会のメンバーですので、分科会に参加ご希望の会員の方は、代表者か私の方へご連絡ください。(分科会理事 五味田幸夫)

住所・電話番号等の訂正と変更

会員名簿に誤りがありましたのでお詫びして下記のように訂正いたします。また、住所変更等がありましたのでお知らせいたします。

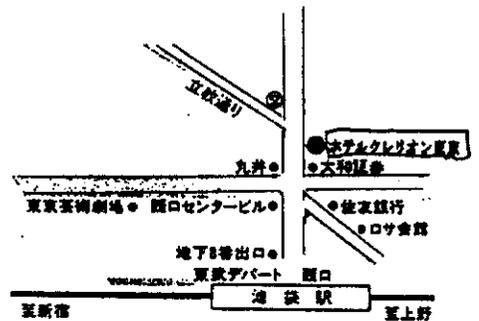
- (1)
- (2)
- (3)
- (4)



会報第17号の学会組織の訂正

前号4ページの「英米文化学会組織について」の記事のうち、委員会関係に誤りがありましたので、お詫びするとともに訂正いたします。

1. 下記の先生方を委員会のメンバー表に追加してください。
名和雄次郎(学術)、大西章夫(財務)、石山伊佐夫・大東俊一(企画)
2. お名前の誤り
編集委員の「宮崎恵子」は「宮崎敬子」先生が正しいお名前です。



↑ 第84回例会懇親会会場

編集委員会から会報記事募集のお知らせ

編集委員会では、会員の皆様に有益な情報を提供することによって、NEWSLETTERの内容を多様化したいと考えております。つきましては、強く印象に残っている書物の紹介や感想、ご使用中の辞書・事典類の評価・批評等についてのエッセイを募集いたします。お寄せ戴いた原稿は、随時、NEWSLETTERに掲載する計画です。どうぞご遠慮なく、ご投稿ください。

原稿送付先：〒 中村 豪

編集・発行：英米文化学会編集委員会＝池田 広子、小川 喜正、岸山 睦、武井 朗子、中村 豪、
宮崎 敬子、山根 正弘
発行責任者：中村 豪 〒363 埼玉県桶川市川田谷2509-12